

# 中国庶民の目で見た「改革開放」体制の現状と未来

本野 英一



四六判 346頁  
 白水社  
 [税込 2,970円]

フランク・ラングフィット著／園部哲記  
 上海フリータクシー  
 野望と幻想を乗せて走る「新中国」  
 の旅

エドガー・スノー以来、アメリカのジャーナリズムには、中国の反体制政治活動家、あるいは一般庶民を取材し、彼らの半生、自国の国家体制に対する意見を踏まえて中国社会の真実を世界に伝えるというお家芸がある。ここに、彼らの輝かしい伝統に加わる新たな書物が出現した。

著者は、一九九七年から二〇〇二年まで『ボルティモア・サン』紙の北京特派員を務め、二〇一一年から二〇一六年にかけて今度は、National Public Radioの特派員となって上海で暮らした。そしてその昔、フィラデルフィアでタクシー運転手をしていた経験を活かし、上海で無料タクシーの運転手をしながら、お客となった中国人から乗車賃の代わりに、彼らの身の上話、中国やアメリカに対する意見を思う存分打ち明けて貰うという独創的な方法で中国庶民が何を考えている

のか、彼らにとって何が大事なのかを探り、習近平が唱える「中国の夢」とは一体何なのかに迫る。

取材対象となったのは、主に上海で社会的地位を得た人間とその親族である。例えば河北省出身で、両方ともに弁護士となった兄弟とその弟弁護士の婚約者、彼らの母親、あるいは船舶部品工場のセールスマン、裁判官や検事を目指したものの夢破れてスウェーデンに留学し、人権派弁護士となった女性、共産党と有力なコネをもつ家庭出身でアメリカ留学生となった女性などである。彼らはいずれも中国本土やアメリカで高度専門職の地位を手に入れることができた成功者である。自らの半生だけでなく、国内体制全般、アメリカや西洋に確たる意見を持ち、これをアメリカ人に語れる能力がある人間は、一定水準以上の教育を受けた人間に限定されるのが

当然であろう。

取材を通じて著者は、中国の庶民が最低限の食と居住生活の心配から解放されたことを確認する。しかし、中国社会で暮らしているのは、社会的地位のある洗練された思慮深い人間だけではない。そこには「広い世界を知らず、公共心に欠け、他人の権利などあまり気にしない国民もまだ何億といる（本書六〇頁）」。その結果、いい加減なことで悪名高いビジネス文化、ペテンがはびこり、信頼は稀少資源の一つと見做される。住民の一部は、人生というのは飛び抜けてずる賢く、とびきりのコネを持ち、道徳などまったく気にしない者が有利を得、空間とモノを分捕るダーウイン的生存競争であると喝破する。人びとは「誰を信じていいのかわからず誰が自分に危害を加えるかわからない。今食べているものが安全かどうかにはまったく確信が持てず、呼吸をするたびに自分の肺が―あるいは自分たちのこどもの肺が―どれだけ傷むのかわからない（本書八五頁）」という恐怖の中で生きなくてはならなくなる。

そんな中で、稀少資源である信頼を維持するにはどうすればよいのか。それはコミュニテイのつながり、血族関係のつながりを基盤にしない。知人と他人の間には明確な一線が引かれ、道徳律の多くが、他人との関わり合いに適用され

なくなる。すなわち、道徳律は、自分と社会的距離の近い人間にしか適用されない相対的なものになるのである。これは、著者が、顧客となった中国人の口を借りて伝える中国社会の姿であり、有名な費孝通の「差序格局」論そのものである。この特徴は、何に由来しているのか。最大の理由は、一般庶民の土地財産に対する排他的所有権が保障されていないから、の一言に尽きる。「改革開放」体制になっても事情は全く変わっていない。

共産党は上海を、全世界の多国籍企業を魅了する中国版「エメラルドの都」に作り上げるために、無数の庶民の土地財産を奪った。著者は、そうした庶民の一人であるリーと、その弁護士、ジョンナという二人の女性の半生記を第五章で紹介している。前者の代表であるリーは、政府によって母の家と所有地を一方的に奪われ、解体されたことに対する賠償請求を十数年間続け、警官と乱闘沙汰を起こして懲役一年を言い渡され、刑期を終えて出所したばかりである。彼女の弁護士であるジョンナは河南省で食用油と小麦粉の販売店を営む家に生まれた。父親の在庫品を恣に差し押さえる地元小役人に怒りを抱き、判事が検察官を目指したものの夢は叶わず、 Lund 大学国際人権法修士課程に留学し、学位を取得して帰国後、人権派弁護士となった。

二人は、共産党が成し遂げた、驚くべき経済成長と数々の都市建設の影で悲惨な境遇に追い込まれた犠牲者と抵抗者の一例にすぎない。共産党は、彼らのような人びとの存在を一般大衆に知られぬよう巧みに動いている。それでも、公の場での抗議活動はなくならず、それどころか増加し続けている。抗議活動が続ける人間やその支援者が、天安門事件だけでなく、大躍進や文化大革命といった恐ろしい所業の真実を知り、一般大衆にこれを広めれば、共産党の支配の正当性が揺らぎかねない。だから共産党は、一般大衆が批判的思考を持ち、歴史的事実を追求することに脅威を感じるようになっていく。

彼らが恐れているのは、一般大衆に共産党史の真実を知れることだけではない。キリスト教徒もその警戒の対象となる。キリスト教徒には、太平天国運動以来、中国国内の改革運動で一定の役割を果たした前歴があり、今でも大衆を動員して政治変革を促す潜在的能力がある。前述のジョハンナも含め、人権派弁護士が多くがキリスト教徒であり、二〇一四年の香港民主化運動のリーダーの多くもキリスト教ミッションスクールで教育を受けていたことを思い起こせば、共産党が彼らの活動に神経質になるのも当然である。

かくして共産党は、もはや神通力を失った社会主義イデオロギーに代わって、中国人としてのアイデンティティと愛国

主義を強調するようになり、前にも増して一般大衆に、国外の敵と歴史上の傷への怒りを煽るようになった。その格好の標的が日本である。彼らは日本への憎悪を煽るために新聞、テレビ、映画、ビデオを動員し、日中戦争や尖閣列島領有権を盛んに宣伝する。上海の小学校の学芸会で、いまなお抗日戦争劇が上演されるのはそのためであり、決して日本人の「歴史への反省が足りない」ことだけが原因ではない。

このような政策を通じて一般庶民に深く浸透した愛国主義は、アメリカや西洋留学体験などで覆るような生やさしいものではなくなった。著者は、その一例として、アメリカで法律を勉強した前述の河北省出身の弁護士兄弟の兄によるアメリカ批判を第九章で紹介している。彼はアメリカに対する深い愛情を抱き、その自由と法の支配を高く評価する。だが、だからといって中国の隆盛を牽制し、中国の邪魔をするアメリカの行為、とりわけ近隣諸国との領海紛争に立ち入るアメリカを許さない。それでもこれはまだましな方であり、アメリカやヨーロッパでの長期間の留学、勤務体験のある若い世代の中国人の多くは、祖国の現状だけでなくアメリカや西洋諸国全般に対して幻滅を抱くようになっていっているのである。

本書第一章から第三章に登場するアシユリーは、彼らの西洋認識を次のように述べる。「八〇年代に生まれた人た

ちほだいたい常識があつて、民主主義はよいものだと思つています。でも若い世代はもうそんなふうには考えないと思ひます。西洋文化がいいとは思わない。現在のアメリカを見なさい。フランスがだめになつたのを見てごらん。彼ら「若い中国人」はパリが嫌いです。彼らからしたら落伍した町に見えるから。彼らは必ずしも自由を必要としていません。自由と民主主義というのは、実際には機能しない空っぽな観念だと考えているんです（本書二七九～二八〇頁）。

こうした若い中国人の暗黙の支持を受けて、共産党はアメリカや近隣諸国に対しますます強気に出るようになった。そしてこれに反比例して、アメリカ人の中国観も急速に悪化している。特にひどいのはアメリカ実業界である。その原因は、アメリカ企業から虎の子の先端技術を窃取するために手段を選ばぬ共産党政府の政策である。これが、アメリカの対中国政策大転換の背景となつてゐることについては特に説明する必要もあるまい。

しかし、中国はこれからもずっと隆盛を誇つていられるだろうか。著者はこれに疑問を抱いている。その第一の根拠は急速に進む高齢化と若年労働力の枯渇である。第二に、経済的に成功し、富を得た者ほど我先に海外移住を目論むように、中国国民自身が自国の安泰を信じていないことである。

それでも、共産党政府は、既に効力を失つた輸出と過大な投資に依存した経済政策を放棄しない。彼らが本来なすべきことは、公的債務を大幅に削減し、多くの国営企業改革を行い、そして技術革新を通じて高価値製品と高価値サービスを開發創造することなのに、こうした政策を打ち出す気配が一向に見られない。国内外で彼らのやり方を疑い、批判する者に対して、共産党は容赦ない態度を見せるようになってゐる。これが、習近平が躍起となつて「中国の夢」を唱える所以である。

この政策はまだしばらくの間、国民から熱狂的支持を得ることであろう。しかし、経済成長の鈍化、環境破壊がもたらす国民の健康被害、人口高齢化に伴う労働力人口枯渇、対米関係悪化をいつまでも放置しておけない。それを承知で愛国主義を強調し続けるということは、共産党は実は大変危険な賭けに出ているのではないか。もしこの賭けが敗れた場合、彼らは大変困難な立場に追い込まれる。もうお分かりであろう。著者は、今の中国と米中関係は一触即発の危機にあると見ているのである。この状態は、果たしてあと何年持つのか。本書は、中国社会の仕組みを知るだけでなく、これを歴史学的に展望するためにも、一読に値する。

（もとの・えいいち 早稲田大学）